



都市の復興、そのあるべき形とは

ポーランドの首都ワルシャワは、国の政治・経済の中心地であるとともに、国内屈指の観光地でもある。ヨーロッパの古都の例にもれず、前近代の都市部（＝旧市街）があり、ここが観光の目玉になっている。しかし、世界遺産にも登録されたワルシャワの歴史地区は「レプリカ」である。かつて「北のパリ」と称されたその街並みは、第二次世界大戦中に壊滅的破壊にみまわれ、旧市街の建造物の85%が瓦礫の山と化した。

ポーランドの戦後復興において、首都の再建は最優先事業であったが、再建方法をめぐる議論は白熱した。国民には複数の選択肢があった。

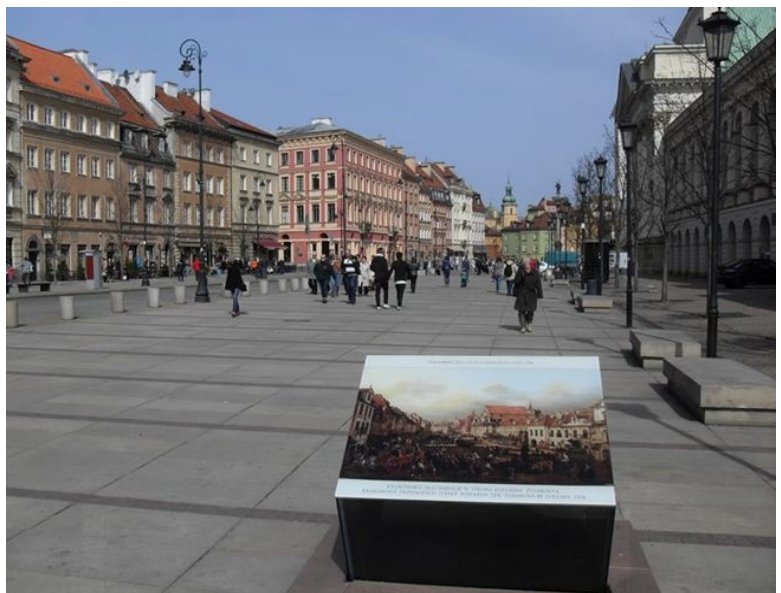
- ① 戦争被害の少なかった別の都市に遷都し、ワルシャワは戦争記念碑として廃墟のまま保存する。
- ② 最新の都市計画に基づいてワルシャワを新しく生まれ変わらせる。
- ③ 破壊される前のワルシャワを復元する。

最終的には、「意図的に破壊されたものは、意図と目的を持って再興する」という強い信念のもとで、③が目標に掲げられた。「首都復興局」が組織され、市民のカンパとボランティア、他都市からの支援を得てがれきの撤去から始まった作業は、3年程度でほとんどの建物を復活させ、ついには旧市街全体が昔ながらの姿を取り戻した。

復元計画の拠り所になったのは、戦前のワルシャワの姿を記録した各種の資料だった。写真や市街地図はもちろん、建築学科の学生達が描き残していた建物の図面やスケッチ、また、18世紀の風景画家ベッロットの風景画も手掛かりになった。「壁のひび割れ一本に及ぶまで」忠実に再現するこだわりようだった。さらに、可能な限り古い資材を用いることに重きを置き、他都市から、戦災で倒壊した建物に使われていた石材・レンガ・木材の提供を受けた。

文化財に関しては「オーセンティシティ（真正であること）」が非常に重視される（ヴェニス憲章、1964年）。そうした観点から、ワルシャワの復元は、文化財保存の精神にそぐわないものとして当初は好意的にはみられなかった。しかし、「都市の再生への国民の意志」「重要な文化的環境を守ろうという意志」の象徴としての意義を認められると、世界遺産への登録（1980年）に加え、2011年には首都復興局の資料がユネスコ「世界の記録」に登録された。

戦災や自然災害によって破壊される都市は今も世界中で後を絶たない。老朽化した古い街区の再開発問題も、各地の行政・住民を悩ませている。どうするのが最善なのか。ポーランドにおいても、ワルシャワなどはやはり特例で、②の方法で復興したところも多い。また、惨禍の記憶を後世に伝えるのに最も効果的なのは①の方法かもしれない（広島原爆ドームのように局所的であれば、廃墟として保存するの較的容易だ）。歴史的景観を残しつつ、末永く暮らせるまちにするには、何をどう取捨選択すればよいだろうか。



ワルシャワの街とベッロットの絵画（『ガーディアン』より）

<https://www.theguardian.com/cities/2016/apr/22/story-cities-warsaw-rebuilt-18th-century-paintings>（2024年12月1日最終閲覧）